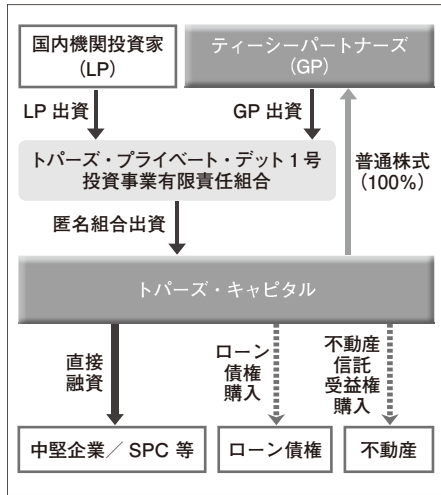


## ト・パーズ・キャピタル、 銀行が貸しにくい先に資金を供給



欧米では、プライベート・エクイティ・ファンド（PEファンド）よりも市場が拡大しつつあるというプライベート・デット・ファンド（PDファンド）。日本ではあまりなじみのないファンドだが、国内で独立系としてその組成を初めて手がけたのが、貸金業や投資事業組合財産の運用・管理を行うト・パーズ・キャピタルだ。

ト・パーズが運営するファンドは、保険会社や企業年金基金といった機関投資家等から集めた資金を元手に、事業会社等への融資を行うほか、銀行等のローン債権および不動産の買取りなども行う。融資形態は、コーポレートローン（劣後ローンを含む）やノンリコースローン、動産担保融資（ABL）、DIPファイナンスなど多岐にわたる。直接融資が主体のため、担保をとることで債権の安全性をある程度確保し、グロスで7〜8%程度の利回りを目指す。投資家にとり、不動産や社債に限られていたミドルリスク・ミドルリターンへの投資手段に新たな選択肢が加わることになる。借手企業にとっては、PEファンドと比べると、経営の干渉を受ける懸念が比較的低いメリットがある。

直接融資を主体にするといっても、同ファンドは、銀行にとって必ずしも競合相手ではない。銀行の取引先はなかで、過去に法的整理を経たり、再生途上にあつたりして、これ

以上銀行が融資をすると融資の形式基準に抵触するという企業は少なくない。その企業の事業内容がよい場合、ファンドが銀行に代わって融資を実行できるからだ。また、目ぼしい担保といえは、動産しかないという取引先企業（在庫を抱える小売業や、大量の工作機械を保有するメーカーなど）に対し、ABLを通じて資金の供給も行う。動産評価では、ゴードン・ブラザーズの協力を仰ぎ、同社との協調融資も手がける。

融資分野は絞らず、ベンチャーから企業再生まで幅広く手がけ、銀行が貸しにくい先にも、機動的に資金を融通。「借手企業、投資家、銀行の三者が相応のメリットを享受できる仕組み」（重光孝司取締役パートナー）とする。

ト・パーズには、旧日本興業（現・みずほ）銀行、ゴールドマン・サックス、ユニゾンキャピタルの出身者が参画。2月末には第一次募集を終え、数十億円程度の資金を集めた。今後、1年間かけて200億円程度にまで拡大する。すでに銀行からの紹介や企業からの直接の申込みもあり、審査対象は80件超（4月末時点）にのぼる。一般的に、融資実行に至るのは、そのうち4%前後。早ければ6月にも第一号案件が誕生しそうだ。（田中）

※「Baila Bien」は、スペイン語で「素敵な踊り」と踊り子を称賛する際に使われる言葉です。